（ 続紙 1）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	戸田　美佳子
論文題目	カメルーンにおける障害者の社会性 －生業とケアの実践に関する人類学的研究－		

（論文内容の要旨）

本論文は、カメルーン共和国における障害者のケアをとおして、その「社会性」を明らかにすることを目的としている。ここでいう「社会性」とは、英語では"sociality"にあたり、個々人が社会のなかでさまざまな関係を取り結びながら存在している、そのあり方を示している。

序論第 1 章では、障害をめぐる先行研究の論点を整理し、本論文の視座を明らかにしている。今日の障害学においては、障害を個人的・身体的な悲劇（インペアメント）とみる見方から、社会的な構築物（ディスアビリティ）とみる見方への転換が遂行されつつある。しかしそこには、障害をなお、ある種の「カテゴリー」としてみる見方が残っている。本論文では、障害者と周囲の人びととの相互行為としてのケアの分析をとおして、地域のなかで相互の活動がどのように組織されているのかが示されている。ここで注目されるケアとは、「目の前にいる他者の生存へ配慮する」というローカルな視座に立脚するものである。そこから「カテゴリー化」に抗する方向性を見出そいうというのが本論文の目論見である。

序論第 2 章で、調査対象と方法について述べた後、第一部（3 章～5 章）では、カメルーンにおける社会福祉の歴史が記述されている。その歴史はドイツ保護領下における帝国医療や慈善活動、そして独立国家形成期を経て現在に至っている。その過程で、植民地支配のもとで実践された睡眠病・ハンセン氏病対策などの熱帯医学は、キリスト教ミッションによる宣教医療へと取って代わられ、現在ではリハビリテーションを主とする慈善医療へと繋がっている。

第二部（6 章～11 章）では、カメルーン東南部の熱帯雨林地帯に位置する農村における調査結果が記述・分析されている。この地域には、狩猟採集民バカ・ピグミーとバントゥー系農耕民という、異なる生業活動をおこなうエスニック集団が共住している。これらの人々の社会関係と生業活動の記載ののち、そこに生きる障害者たちの生活実践が、生計活動を中心に分析されている。その結果、障害者たちは、通常は越えがたいはずのエスニック集団間の敷居を乗り越えて関係を築いており、またそういった関係は固定的なものではなく、ケアの担い手は頻繁に変動しているということが明らかにされた。

第三部（12 章～14 章）では、流動的で多様な生活背景をもつ人々が集まる「公共圏」としての都市における障害者たちの生活が記述されている。まず、地方都市ヨカドゥマにおける障害者たちは、農村のような、親族や共住に寄りかかった社会関係を完全には維持できてないものの、それらを再強化し、あるいは新たな関係性を探り当てつつ生活していた。一方、首都ヤウンデでは、事態はより複雑化しており、3 つのタイ

プの障害者が観察された。(1)ミッショナリーのリハビリテーションを求め都市を訪た障害者、(2)ヤウンデ生まれの障害者、(3)カメルーン北部や、近隣の他国から来て物乞いを「職業」として生計を立てているイスラームの障害者である。とくに(3)のカテゴリーに入る障害者たちは、自らの障害を「資源」として物乞いを営んでいた。しかし市民の視線は、「この人たちはそういう人たちなのだ」という「区別」は存在するものの、それは「差別」までには至ってないというものであった。

終章では、これまでの議論を踏まえて、カメルーンにおける障害者の社会性の特徴を、「対等性」という概念を用いて検討している。対等性とは、「平等」概念のような、全体を考えて均分するという考え方とも、「相等」概念のような、類似や同化を理想とする考え方とも異なっており、事態を「わたしたちの、いまここでの」問題として捉えるという視点である。本論文の調査地において、障害は差異・区別として否定しようもなく存在していたが、そのことはかえって、村と都市の双方で、障害者をめぐる、インター・エスニックな繋がりを創出する原動力となっていた。それが第二部では、エスニック・バウンダリを越えて生業とケアがおこなわれる事例として、第三部では、物乞いを職業として捉えるという視点として現れていた。これらは、差異をもとにした対等性の創出と捉えられている。このように対面的な相互行為が対等な関係へと築かれていく過程のなかに、障害者の生存を保障しうる社会性が最もよく理解できるという結論で、本論文はしめくくられている。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文で分析されているのは「障害者の社会性」である。ここで言う「社会性」とは、「あの人は社会性がない」などといった通常の用法ではなく、今村仁司氏の論考に見られるような "sociality"、すなわち社会の中での人間のありようを（通常は「社会性がない」と言われるような状態をも含みこんで）呼ぶ言葉として用いられている。

障害者の社会性について本論文の冒頭で述べられているのは、障害やケアに関する議論をめぐってわれわれが感じる、ある種の「息苦しさ」である。それがアフリカにおいてはあまり感じられないのはなぜか、というのが、本論文を通じて解き明かそうとされている問題である。障害を社会的な現象であると見る最近の障害論の転回によっても、この問題は解消されてないばかりか、さらに強固になってきているとさえ言える。すなわち、たとえ障害の構築性が示せたとしても、その構築を否定しようとするとき、そこにまた「差別するまいとする差別」という新たなカテゴリーが生成してくるというジレンマが存在するのである。

この問いに答えるための予備作業として、本論文ではまず、議論の背景となるカメルーンの社会福祉の変遷に関する記載がおこなわれる。それは文献サーベイのみならず、申請者自身が施設を訪問しておこなった聞き取りを加味したものである。アフリカの一国における社会福祉について、これほど詳細な歴史像が提示されたことはこれまでなかったと言ってよく、この点が本論文の一つめの貢献であると言える。

次いで、カメルーン東南部の熱帯雨林の村、その近隣の地方都市、そして首都ヤウンデにおいて長期にわたっておこなわれたフィールドワークの結果が記述・分析される。そこで取られた方法論は、一足飛びに障害者をめぐる社会関係を見ようとするのではなく、彼らの生存のための生業活動（subsistence activities）を生態人類学的な視点で観察していく、というものであった。この「していること」に注目するという方向性が、ともすれば思弁的になりがちな障害をめぐる議論を、地に足のついたものにしている。そこで見出されたのは、民族の境界を越えて関係を展開し、また障害自身を「資源」として生き抜いている障害者たちの姿であった。また、人々の障害者たちへのまなざしは、「障害がある」という事実を見ないようにするというのではないが、しかし障害によるスティグマ視や、カテゴリー化ということはことさらにおこなわない（すなわち、「区別」はあるが「差別」はない）、というものであった。このような状況が、しっかりとしたデータに裏付けられて描き出されている。こういった詳細な記述を与えたということが、本論文の二つめの貢献である。

以上を踏まえて、結論において「対等性」という視点が提示されている。カメルーンの障害者をめぐって見出された特徴のひとつは、ケアをおこなう人が固定されておらず、そのときどきに移り変わるということであった。これは、ケアが不安定だいうことではなく、むしろ周囲の人たちが状況をカテゴリー化せず、その時々に「いま・ここ」での顕在化しない配慮を障害者に対しておこなっているのだ、というのが申請

者の解釈である。そして同時に、障害者の側も、そういったケアをたぐり寄せるネットワークをその時々に展開している。これがカメルーンの障害者の社会性なのである。そのような障害者の姿が「一人前（いちにんまえ）」という言葉で語られているが、たとえ互いの状況は等しくなくても、「一人前」として相手に対せるという状況が、「対等性」という言葉で呼ばれるのである。「対等性」は、障害論、ケア論を語る上で重要なキーワードとなりえるものであり、この視点の発見が、本論文の第三の大きな貢献であると言える。ただこの概念は、まだ十分に彫琢されてない側面もあり、今後いっそうの考究を要する、というのが審査の過程で出された意見であった。

以上、本論文は長期の詳細なフィールドワークにもとづいて、アフリカにおける障害者とそのケアという問題に取り組み、この分野にさまざまな新しい局面を開いた意欲作である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 25 年 2 月 5 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。